

瑞貴「それで？」

僕は腕を新たに組み直して尋ねる。

瑞貴「君のような美しい娘さんが、此のような所で何をしているのかな？」

切れのあるクリアなトーンで。

すると僕の向かいに座る彼女は言う。

葵「お昼休みに、お昼御飯を食べてるだけです」

美しい、実に美しい仕草で、訝しげに。

嗚呼、だがそれは、仕方の無いことだろう。

仄かに香る藤棚の下、疎らに点る木洩れ日の上。

未だ人影も無い広大な敷地を一望する此の場所で。

此の僕に、紳士的態度で話し掛けられたというのだから。

瑞貴「それは奇遇だ。実は僕も、そうしようと思ってね」

瑞貴「辿り着いた先に、君が居たという訳さ」

陶然と敷地を見遣りつつ、徐に食事を進める彼女。

瑞貴「いや寧ろ、君に導かれたというべきか」

葵「もくもく、こくん」

一段落して、彼女が言葉を発する。

葵「でも」

両足をすっと揃えて此方を一瞥。

葵「お弁当、持ってないです」

鋭い、実に鋭い視線で、訝しげに。

瑞貴「僕はお弁当持参の身ではなくてね」

懐疑の言葉も流麗に受け流す僕。

瑞貴「残念ながら、部屋から持ち出せたのは」

瑞貴「此のトレイだけだったという訳さ」

片手で持ち上げ肩を竦める。

葵「・・・・・・・・」

妙に腑に落ちたという様子。

葵「ということは」

さっと体を30度ばかり背けて。

葵「紳士的な風を装って、狙いはこれという訳ですね」

瑞貴「ばれたお(^ω^)」

葵「ばれたお(^ω^じゃないです」

あちゃー。

瑞貴「ばれてしまっては致し方無い」

無慈悲な声色と共に、すっと立ち上がる。

私の豹変に、彼女の体がプラス5度背く。

瑞貴「膝ごと回避されたランチボックス」

ターゲットを確認。

瑞貴「その距離推定僅か0.0012km」

三次元的に距離を算出。

瑞貴「護衛するは彼の二槍の使い手双葉葵（ふたばあおい）」

障害即ち排除の対象を特定。

葵「何切迫感醸し出してるんですか」

守護者（トレイ）を構え、陽動を試みるも効果は無い。

葵「そんなことしたって、あげません」

寧ろ、更なる警戒を喚起してしまったようだ。

葵「それどころか、私の箸捌きで目も当てられない有様にしてしまいます」

しゃきーん。

揺れる木洩れ日の陰影を帯びて、彼女の気迫は一層の圧力を伴う。

細められた双眸が発する眼光が、私のシールドを容易く貫通する。

瑞貴「・・・・・・・・っ」

それは此の場所此の時間、敷地とは隔絶された藤棚時空。

姿を見せ始めているであろう人々には認識すら叶わない。

現にほら今そこ一人、見て見ぬ振りして通り抜けたように。

彼女が支配する此の空間に於いては身動き一つ、死に至る。

現実の一瞬をそれらの思考に費やした私は、苦渋の表情で呟いた。

瑞貴「最早・・・これまでか」

許される挙動は表情のみ、そう観念する私・・・の視線の先に。

瑞貴「竹輪しか無いお(^ω^)」

葵「竹輪しか無いお(^ω^)じゃないです」

落胆の色が滲む一言に、金縛りが嘘のように解かれた。

葵「目にも留まらぬ箸捌き、一瞬でも目を逸らした貴方の負けです」

彼女は勝者の余裕を湛えると、くすりと笑んだ。

瑞貴「う、うあ、ああああ」

弁当箱というスケールに収められた魅惑の世界は、瞬く間に幻想となってしまった。

糸の絶たれた人形のように、私の四肢が崩れ落ちる。

瑞貴「鶏つくねがっ、出し巻き卵がっ、お稲荷がっ、鯖の生寿司がああああっ!!!」

葵「一昨日来やがれです」

その態度、取り付く島も無い・・・かのように思われた。

が。

瑞貴「どうして竹輪があるお(^ω^)」

葵「ど、どうして竹輪が・・・じゃないです」

微妙な切り口の違いが、思いも寄らぬ反応を呼んだ。

瑞貴「あるおあるお、竹輪があーるーお(^ω^)」

葵「あるおあるおあるあるぁ・・・って、し、しつこいです」

瑞貴「そんなに言ってないお(^ω^)」

葵「・・・っ」

その様子、追い詰められたということか、油断大敵とは

葵「えいっ」

ぶすっ

瑞貴「ってあぎやあぁがあああ!!!」

ノタウチマワルこと暫し。

瑞貴「それで？」



僕は腕を新たに組み直して尋ねる。

瑞貴「君のような美しい娘さんが、どうして竹輪を残しているのかな？」

お互い落ち着きを取り戻した所で改めて。

未だ食べてしまわない辺り、実に興味深い。

葵「竹に巻くからです。美味しいです」

瑞貴「・・・・・・・・」

瑞貴「だから竹輪なのかな」

でなくて。

直入に行こう。

瑞貴「問題です」

瑞貴「葵は竹輪が苦手である、○か×か？」

葵「×です」

瑞貴「・・・・・・・・？」

毅然とした回答に戸惑う。

瑞貴「此の僕に、嘘は通用しないよ？」

葵「そういう性格こそ問題です」

・・・・・・・・。

瑞貴「ひょっとして竹輪好き？」

葵「○です」

葵「美味しいものは、最後に頂きます」

嗚呼・・・・・・・・成程。

瑞貴「残念だよ。苦手なら此の僕が、喜んで頂こうと思ったのに」

葵「苦手なものでも、頑張ってください」

「偉いです」と言わんばかりに胸を張る。

瑞貴「諦めるよ、そろそろトレイを返却しないといけないし」

降参のジェスチャーと共に言う。

葵「一昨日来やがれです」

そうして僕は、収穫の無さに打ちひしがれつつ引き上げた。

魅惑の世界に足を踏み入れたいという願望が叶う事は無かった。

考えてみると不可解な点がある。

彼女は何故、好きなら好きで、竹輪を最後になっても残していたのか。

竹輪が苦手なのかという問いに正直に答えているとすると判然としない。

あの時僕は疲れ果てた状態で、すんなり引き上げてしまった訳だが、

密かに彼女の竹輪を見届けていれば、此の謎は解明したのではないか。

深まる謎、竹輪の怪。

藤棚の少女、双葉葵は其処に何を見たのだろうか、嗚呼。

葵「こうやって箸を通して」

きょろきょろ。

葵「蒲焼のようにつ」

周囲の無人を確認し、側面から齧り付く。

葵「見られては堪りません、これは私の尊厳に関わる問題なのです」

藤棚時空の支配者葵は喜色満面に竹輪奥義を繰り出していた。